

古田 昭典さん

77年に測量隊員としてモロッコに派遣される。帰国後は司法書士事務所で働きながら土地家屋調査士の資格を取得し、その後、古田登記測量事務所を設立する。

協力隊参加の動機

古田さんが協力隊の参加を決めた当時は、70年代のオイルショックの影響で、日本の経済状況は悪く、会社の給料が遅配されることもあった。そうした外部的な要因があったことと、古田さんの中で、“自分の力を海外の場で試したい”という思いがあったことから、24歳のときに協力隊に参加された。

活動で苦労した点

モロッコは、アフリカの北部に位置する地中海に面した国で、現地語はアラビア語が用いられ、公教育はフランス語で行われる。古田さんはモロッコ農務省の出先の役所で、同僚たちに測量の技術を伝える現場型の仕事をされていた。フランス語は協力隊の訓練期間中に初めて学習した言語であり、他の多くの隊員にも共通することだが、言語習得では相当苦労されたそうだ。着任当初は辞書を常に持ち歩き、半年経ってようやく仕事がスムーズに進むようになったそうです。

協力隊の経験が帰国後の自分に与えた影響

モロッコから帰国後の古田さんは、生活の基盤を作るために司法書士事務所に必要な資格を取得し、測量登記事務所を設立したり、結婚されたりと、忙しい毎日を送られていたが、同時に滋賀県の協力隊OB会の活動にも尽力された。

協力隊に参加して、“人と人とのつながりを大事にする”ことが重要であると考えようになり、OB会の会長として会の運営に携わり、県内の留学生と一緒に山登りをするなどの交流の場を作られたそうです。また、古田さんが担当された募集説明会において、特に専門技術がなかったが、協力隊参加を希望している若者がいたので、自分の事務所に受け入れたそうです。そして、数年後、仕事をしていく中で、測量技術を身につけてもらい、自分と同じ職種の隊員として海外に送り出したそうです。

古田さんの、“協力隊に参加するのは制約があり、周りの環境、体力、やる気の3つのうち、1つでも欠けていたら参加できない。だから私は、若い人が行ける状態で、行きたいという意味があるなら、ぜひ行けばいいと思います”という言葉が印象的だった。

(OV 訪問の感想)

私の赴任地はヨルダンだったのですが、古田さんはモロッコということで同じイスラム圏として親近感をもちました。30年前に行っておられたので、最初おぼろげだった記憶も話しているうちにだんだん思い出されてき、当時の話を生き生きと語られていたのが印象的でした。

(林 教之)

いままで、協力隊の経験から自分が何を学んだのかと考えても、それを一言で表すことができなかったが、古田さんがおっしゃる、“人と人とのつながりが重要であること”を学べたことが自分自身にとって、一番大事なことなのだと気づかされた。

(井田 陽介)



訪問先の古田測量事務所での古田OVと

インタビュー後、古田さんの職場にて